

#### (身辺雑記 4) 空襲と学校

親の法事で兄弟姉妹が集まると、共通の話題は当然のことながら昔話となる。私たちの世代の昔話と言え、まずは空襲である。私は、終戦の年の春に国民学校(当時、小学校がこのような名称に変えられていた)に入学した。子どもなので詳しい事情は知らないが、大阪市内の家の近くの学校ではなく、私鉄で15分か20分ぐらいの千里山に祖父が住んでいたの、そこから通う国民学校に入った。学校が終わると、多くの場合、電車で市内の父母の家に帰り、夜は翌日の通学に備えて祖父の家に帰るといった日々を送っていた。

と言っても、授業中に空襲の警戒警報のサイレンが鳴ると、直ちに授業は中止で、児童は各自防空頭巾を被って、てんでばらばらに急ぎ家路につく。私の場合は、もちろん祖父の家に帰る。一刻も速く帰着すべく走るのだが、途中、低空飛行をする飛行機が見えると、機銃掃射を恐れて物陰に隠れる。6歳といえども、自らの命を守るの、完全に自己責任である。朝、登校の際には、近辺の住居の児童が集まって集団登校を強制されていたが、下校の際にはそのような規制はない。まして、警戒警報発令で逃げ帰るのに、みんな自分の命がかかっているのだから、必死である。先生も、児童を学校から出してしまえば、もはや関係ない。もちろん、警戒警報が発令されたからとて学校に迎えに来る親などいない。児童は発令と同時に下校させられているし、親自身も空襲に備えなければならないのだから。

そのような日常を送っていたある日、市内の父母の家と千里山の祖父の家を結ぶ私鉄の鉄橋が爆撃を受け、電車が不通になった。そのとき、私はたまたま父母の家にいた。もちろん、千里山の辺りが空襲で被害を受けたなんて報道はない。さあ、翌日の学校をどうするかである。遠い昔のことだし、当時私は6歳だから、家族間でどんな話し合いが行われたのか定かでないが、実際には、祖父と私の二人で、電車で15分から20分はかかる距離を歩いて祖父の家まで行くことになった。まだ、十分明るいうちに父母の家を出て、何時間かかったのかわからないが、真っ暗になった後ようやく祖父の家に辿り着いた。

翌日、きちんと学校に行ったことはいうまでもないが、果たして、そんな必要があったのだろうか。「国民学校」という軍国主義時代の申し子のような学校が、絶対に休んではならないような雰囲気社会全体に押し出していた影響ではないか。

もっとも、私は学校に上がる前に2年保育のキリスト教の幼稚園に入って、1年目はまともに通ったのだが、2年目になると、当時は1年保育で入学してくる子どももそれなりに居て、4月からは前年の繰り返しのようなことばかり行われたことに不満を持ち、程なく「つまらない」と行かなくなった。最初は母も困惑していたと思うが、夏ごろになって、とうとう私を伴い正式に中途退園のあいさつに行った。当時、戦争も激化し、小学生だった姉たちは、学童疎開(うちの場合は岡山の親戚に縁故疎開)するような状況だったことも、影響したのだろう。

というわけで、幼稚園中退の私には、幼稚園と違って、学校は絶対に行かねばならないと教え込む必要を親が強く感じていたとの個人的理由もあったかもしれない。